ガザ地区 ナワール子どもセンター

「みんなで遊びながら学んでいます。」

ナワール子どもセンターは、ガザの南部ハンユニスとラファの中間にあります。2006年の開設以来、パレスチナ子どものキャンペーンが運営資金のほとんどを出しています。スタッフは所長のアマルさんのほかに、指導員が5人います。

ナワール子どもセンターは、近隣の小学生を対象にした日本で言う「児童館」のような存在で、参加登録をしてほぼ毎日のように来て活動する子どもが約200人。夏休みなどには1日に400から600人が押し寄せることもあります。またお母さんたちを対象にした健康や子育ての講習会、家庭用の洗剤やシャンプーをワークショップで一緒に作るなどガザの中でもユニークな存在です。

ナワールセンターの活動を所長のアマルさんに聞きました。

ナワールセンターの活動の特徴は、子ども参加型、充実したプログラム、音楽や演劇の要素、などです。「ナワール」（つぼみの開く様子）という名前自体も子どもたちが選考して決めました。センターの中のルールも子どもたちが作ったものです。アラブ世界ではまだまだ子どもは受身の存在ですが、ナワールでは子どもが主役。スタッフはそのことを自覚しています。

プログラムは入念な計画や準備をしています。たとえば、オリーブの収穫時期の10月には、オリーブをテーマにした活動をたくさん盛り込みました。オリーブをはじめとするパレスチナの農業について知識を持つ。オリーブの収穫の絵を描く。オリーブの成長とオリーブオイルができるまでを知る。パレスチナの伝統的な食べ物を知る。それから実際にオリーブの畑に遠足にも行きました。

ダブカチームに120人

パレスチナの伝統や文化を子どもたちに伝えるのも重要なテーマです。パレスチナの詩人とその詩。ダブカという民族舞踊の練習やチーム作り。120人以上がチームに参加しています。スタッフやお母さんたちが協力して衣装も作ります。子どもたちは踊りや劇が大好き。みんな張り切って舞台中を飛びまわっていました。パレスチナだけでなく近隣のアラブ諸国のことを学び、衣装を着てみたり、ゲームもしました。

ナワールセンターとCFTA

運営を担っている現地NGOのCFTAは女性中心の団体で、2006年にはマジダ・エルサッカさんも来日しました。CFTAはナワールセンターの他に、中高生のための青少年センター、女性のための保健センターも運営しています。ハンユニス難民キャンプにある青少年センターでは、中高生に市民としての自覚を持たせるために「青少年議会」の活動を行っています。

ブレイジ難民キャンプにある女性保健センターでは、産婦人科の診療、ホルモン検査などの医療のほか、女性のための法律相談、簡単なフィットネス設備、庶民的なエステやアロマセラピーなどのサービスも実施していて、女性たちが自信を持って生きるための様々な支援を行っています。

パレスチナ子どものキャンペーンはナワールセンターの運営のほか、昨年のガザの戦争直後には、女性センターへのホルモン検査薬や医薬品の提供、各センターでの健康診断や子ども用衣料品と靴の配布、スタッフたちへの専門的な心理サポートも実施しました。

ナワールセンターでは男の子も女の子も一緒の活動をしたり、歌や踊りなどを教えていますが、ガザの中でも特に保守的な場所にあるので、地域社会の協力を得ながら注意深く活動しています。

勉強もただ座って学習するのではありません。最近の一番のヒットは、国語(アラビア語)の文法を寸劇で学ぶもの。お母さんと二人の娘になって、アラビア語の時制による語尾変化を、「カーナ」さんというお客さんが来ると「ルン」ちゃんが「ラン」ちゃんに変わることとして体で覚えます。アラビア語の格言やことわざも、みんなで紙に書き写したり、意味についてディスカッションして覚えます。書き写したものは、洗濯ロープにつけて部屋に飾りました。こういうゲーム感覚で勉強すると忘れないものです。

「子どもの権利」もゲームで考えます。アハメド（11才）が先生と一緒になって作ったのは、様々な子どもの権利を当てっこするゲームです。みんな張り切って参加してくれました。アハメドも満足そうです。子どもの権利はただ知るだけでなく、センターの中で、お家や学校でどんな風に適用したらよいか、みんなでディスカッションします。ナワールの子どもたちは「ディスカッション」という言葉が大好きです。

パソコンや図書室

ナワールには子どものための図書が揃っています。子どもたちは思い思いに読書を楽しんでいますが、「図書館の友」といってたくさん読んだ子をほめるちょっとしたパーティーもあります。また、お話を読みあったり、聞く練習もします。そして、最後には自分たちでお話を作ります。子どもたちが協力し合って素敵な絵本が4つできました。

現代の子どもたちにはパソコンも欠かせません。ナワールの地域はハンユニスの中でも貧しい地域。親たちも十分な教育を受けていません。子どもたちは新しい技術に関心を持っていても家や学校にはないので触ることができません。そこでナワールではパソコンを子どもが触れるようにするだけでなく、ワードやエクセル、またお絵かきソフトの使い方も教えます。子どもたちはパソコン室をきれいにし、作品で飾ります。子どもたちの視野を広げ、可能性を高めることは今のガザのような状況で非常に大切だからです。

この冬は新型インフルエンザがガザでも流行して、大騒ぎになりました。ナワールではまず子どもたちにインフルエンザはどんなもの？　どのようにうつるのか？　かからないように予防するには？　かかったらどうするの？

などを教えました。得意のゲームや劇を一緒にし、子どもたちがポスターを作りました。それから、お母さんや地域の人たち向けの講習会やワークショップも開きました。そして、ラジオの時間枠を買ってシリーズで専門家の話と、視聴者からの相談に答える番組を放送しましたが、非常に好評でした。

子どもたちはまた、歯の健康についての活動もしました。歯によい食べ物、歯磨きの必要性などをディスカッションして、ポスターや劇で表現します。

毎年中学生になる子どもたちが卒所していきます。卒所のパーティーもしますが、みなずっとここにいたいといって私たちを困らせます。そのくらい子どもたちに愛されているのは本当にうれしいです。

地域に根ざして

ナワールはこの２年間に大きな危機を２回迎えました。１回目は 2008 年夏に、しばらく閉鎖を余儀なくされたことでした。活動を再開できるようになった矢先、2008 年の暮れにはイスラエル軍のガザ侵攻があって、ハンユニス地区も大きな被害が出ましたが、幸いセンターには直接の被害がなく、2009 年３月から再開できました。緊張状態が続いた１年間は多くのスタッフがトラウマを抱え、入れ替わりもあり、なかなか大変でしたが、この二つの危機を乗り越えて、いまセンターはとても充実していると思っています。地域の女性たちへの活動も軌道に乗って、昨年のワークショップには 120 人が参加して修了証を授与しました。4 年たって地域にも根を下ろしたといえそうです。

ナワールセンターのあるガザ南部は、この前の侵攻の時には北部ほど大きな被害を受けませんでした。しかし、家を失ったり、破壊された子どももいます。またこの地域は特に貧しくて、産業もありません。どこの家でもお父さんが失業していて、毎日の生活は大変です。でも子どもたちのエネルギーはそうしたことを感じさせないほど、元気でした。

ナワール 子どもたちの声

「子どもの権利についてみんなでゲームを作りました。子どもの権利を紙にひとつずつ書きました。ほかの子どもたちがそれをあてっこするのです。あてるまでゲームは続きます。子どもの権利と義務について、また大人や国の責任についても、よくわかるようになりました。」

「前は文法が難しくて苦手でしたが、いまは好きです。劇はもっと好きです。劇をすると興奮します。稽古をして、音楽を流して、先生たちも手伝ってくれて。自分に力が湧いてくるのを感じるし、活発になります。ダブカも劇もとても素敵な経験です。」

「私はダブカが大好きです。踊っていると幸せです。ダブカはおじいさんみたいです。私たちがパレスチナ人だということ、その伝統を教えてくれます。」

「劇は国語の勉強になります。文がどんな風に変化するのかがわかりやすくて、前よりもちゃんと理解できるようになりました。」

「みんなでオリーブ摘みの絵を描きました。ちょうどオリーブの時期だったのです。男の人とオリーブの木を描いて、それから女の人が頭の上にかごを載せていて、そこに男の子がオリーブを投げていく。いっぱいになったら大きな入れ物にあけます。男の子はそれから木に登って、棒でオリーブを落としました。」

「昔のことを書いてある本から、言い伝えやことわざを抜書きして、どんな意味かって話し合いました。それから、ロープに吊り下げてみました。」